The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞三輪正胤著『歌学秘伝史の研究』
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	語文. 2018, 110, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73321
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三輪正胤著『歌学秘伝史の研究』

宮　川　真　弥

古今伝授を中心とする歌学秘伝の研究は横井金男『古今伝授沿革史論』（一九四三年）『古今伝授の史的研究』（一九八〇年）を礎とし、いま新たな段階へと入りつつある。本書はその推進者の一人である三輪正胤氏の新刊であり、本書の上梓は斯界の慶事といえよう。まずは、以下にその構成を示す。

第一章　歌学秘伝史とは
　第一節　歌学秘伝史を展望するために
　第二節　歌学秘伝史を『八雲神詠伝』に見る―一如への道（一　八雲神詠は和歌の起源／二　和歌は三十一字と五句からなる／三　潅頂流の秘事として／四　『八雲神詠伝』の成立／五　細川幽斎に伝えられた『八雲神詠伝』／六　神道王道歌道三道は一如）
第二章　潅頂伝授期の諸相
　第一節　『愚秘抄』の形（一　東北大学図書館本『愚秘抄』と諸本との関係／二　東北大学本の構成／三　虎皮を敷く老翁／四　化人、人丸は虎皮を敷く／五　再び『愚秘抄』の問題へ）
　第二節　『竹園抄』の流伝
　第三節　心敬をめぐる三つの秘書（一　『私用抄』をめぐって／二　『大胡修茂寄合』をめぐって／三　『ささめごと』をめぐって）
　第四節　暗号化された秘事（一　集大成される秘事／二　暗号の構造／三　暗号としての機能）
第三章　切紙伝授期の諸相
　第一節　切紙の総体（一　切紙の大きさ／二　切紙集には意味がある／三　『神皇正統記』の理念を受けて）
　第二節　切紙を読む―近衛流切紙集の変容
　第三節　切紙に託された願い
第四章　神道伝授期の諸相
　第一節　貞徳流の軌跡―墨流斎宗範をめぐって
　第二節　『月刈藻集』の形（一　吉田神道書との関わり／二　吉田神道の歌学書との関わり／三　下巻冒頭部からの展望）
　第三節　荷田春満の神道説の成り立ち（一　『玄要抄』の成立をめぐって／二　『玄要抄』の講義〔（一）講義の階梯及び講義の姿勢／（二）『日本書紀』の扱い方／（三）『玄要抄』の講義内容〕）
　第四節　吉田神道の再興―『玄要抄』をめぐって（一　『玄要抄』から『幽顕抄』へ／二　「理気」説の応用／三　『思瓊抄』という書／四　『八雲神詠伝』との関わり）
　第五節　吉田兼雄の事蹟（一　『八雲神詠伝』をめぐって／

二　兼雄の関わった歌学秘伝書類／吉田兼雄事蹟年譜）
第六節　呼子鳥の行方（一「よふことり」のある説／二高野山遍照尊院栄秀／三　雲伝神道における「呼子鳥」）
第七節　高野山に伝えられた雲伝神道（一　量観から栄秀への伝授／二　雲伝神道における量観／三　雲伝神道の系統に関わること／四　『八雲神詠伝』との関わり／翻刻『神代巻古歌口伝并八雲口授　古歌略註中雲師傍註』）
第五章　明治時代に受け継がれたもの
第一節　『詠史百首』から『内外詠史歌集』へ（一　『詠史百首』をめぐって／二　『内外詠史歌集』をめぐって）
第二節　『詠史歌集』と『前賢故実』（一　『詠史歌集』をめぐって／二　『前賢故実』との関わり）
第三節　詠史和歌の行方（一　歌仙歌集類をめぐって／二詠史和歌の行方）
本書の論考の要旨と初出発表年
『歌学秘伝の研究』正誤表
あとがき
書名・事項索引
〔はじめに等は省略し、各節以下の題は（　）で示した。〕

本書は資料の精密な読解を踏まえ、それぞれを史上に位置づける。特に前著『歌学秘伝の研究』（一九九四年、風間書房）でもひとつの中核をなした『八雲神詠伝』をめぐる諸論は、歌道と神道の結節を示し、仏道における潅頂伝授の影響の指摘と併せて白眉である。清濁の伝授と儒仏の移点の関わりについても興味が引かれるところである。

第四章第一節では、貞徳流の伝授においては儀式が行われず、口伝から書伝へと変化し、それが伝書の売買へと繋がっていく様相が活写される。無窮会蔵『北村季任聞書』収載の血脈に「貞徳ハ非直伝。箱伝受也」とあることなどとも符合する指摘である。

氏は歌学伝授史を潅頂伝授期・切紙伝授期・神道伝授期に分ける。前著は前二期を中心としたものであった。本書は前著を継ぐものとして、全期を扱いつつ、神道伝授期以降に力点があるものといえよう。本書によって、歌学秘伝発生期から近代に至るまでの諸相を通観することが可能になった。とりわけ、第五章において明治時代までを扱うのは、まさに「歌学秘伝史」を標榜して面目躍如たるところである。前著と本書とを新たな階梯として、更なる蓄積がなされることを願ってやまない。

（風間書房、二〇一七年一〇月、四八八頁、一六、〇〇〇円）

（みやがわ・しんや　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫訪問研究員（日本学術振興会）・日本学術振興会特別研究員）